二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 酒井　仁
挿絵 カズマサ

序章 006
第一章 破戒シスターと少年 011
第二章 屈辱の尻穴陵辱 034
第三章 神父の罠・悪夢の強制フェラチオ 071
第四章 戦慄の傀儡愛撫 110
第五章 恥辱放尿・汚されし聖杖 152
第六章 狂乱の姉妹相姦と触手陵辱 203

登場人物紹介

Characters

ミリア・ルフィード

聖杖リヴォルファスの使い手に選ばれ、生まれ持った霊力で魔を祓うシスター。勝気で男勝り、悪魔崇拝者を相手に派手に立ち回る。

サラ・ルフィード

ミリアとともに教会で育った尼僧。普段は穏やかに振る舞っているが、戦闘時には銃火器を用いて敵を蹂躙する、加虐的な本性を現す。

マキシミリアン

悪魔崇拝者に拉致されていた少年。ガルニエ神父の教会で育てられた孤児。霊媒の資質を持っている。

アレクシオ

元エクソシストだった初老の神父。ミリアたちに協力する。

ガルニエ

マキシミリアンの育ての親を務めた神父。

仲間の見ている前ではしたない牝の本性を暴いてやるのだ!!」
　神父の言葉に男たちは大歓声を上げた。はしっこい男が細身の身体を抱きすくめ、精液に濡れた胸に顔を押しつけてくる。そのまま正常位で押し倒そうとすると、別の男がその首根っこを掴み上げて凄んだ。
「大勢いるんだ、効率よく楽しもうぜ……」
　剣呑な声に尼僧を抱きしめる男はしぶしぶ身を起こし、指揮官がしてみせたように仰向けになった。そして小柄な身体を腰に乗せると、いきり立つ凶器を前戯もなしにぶち込んできた。にゅるっ……すっかりこなれた肉とたっぷり注がれた樹液のおかげで、太竿は呆気なく胎内に呑み込まれてしまう。
「あうぅッ！」
　痛みこそないが、肉穴を拡張される感触に思わず腰が浮きそうになる。すかさず男の腕が伸び、細くしなやかな太腿をガッと捕まえて抱き寄せた。抱き寄せながら腰を突き上げると、「ぶちゅっ！」と根元まで突き入れられる。
「おほぅっ、こいつぁいいま〇こだ！　ビクビク締めつけてきやがる」
「あふぅぅァァアッ、あっ、あひぃぅウゥッッ！」
　ぐちゅっ、ぐぷっ、グポッ、ズポンッッ！
　激しい突き上げ運動に、快感の余韻がぶり返してくる。ザーメンの充満している肉壺を掻き回され、じゅぐっ、じゅぐっと湿った音が響き渡る。愉悦に震える尼僧の尻肉が、背

後からの手にむずと掴み上げられた。
「ひっ……？」
騎乗位で犯される眼鏡シスターの背後から別の兵士が尼僧衣の裾をめくり上げ、尻肉をぐいぐいと揉んでいた。ヒップの割れ目に食い込んだ黒レオタード生地を爪でひっかけ、力任せに引っ張り上げると、菊蕾がひやりとした空気に包まれた。フジツボのような暗紅色の排泄口がきゅっとすぼまる。
「ちょ……や……ァァッ！　そ、そこ、は……」
まさか、と恐怖に駆られ息も絶え絶えに声を上げるが、男は信じられない行動に出た。れろりとねぶった唾液まみれの指先を肉蕾にあてがうと、ぶすりといきなり第二関節まで捻り込んできたのだ。
「あひぃィィッッ！」
通常、老廃物を排出する部分に異物をねじ込まれ、名状しがたい違和感が背筋を駆け上る。括約筋が限界まで収縮するが、ずっぽりと突き立てられた太い指は抜け落ちるどころか直腸の中でかぎ爪のように折り曲げられる。その状態のままで男はぐりんっと手首を回転させ始めた。ごりっ、ごりっと直腸壁が擦り立てられ、尼僧の目が見開かれる。
「ひきっっ……くぅ、くひぃ、ひぃィィァアアアッッッ？」
苦痛というより圧迫感、痛みではなく名状しがたい違和感がぞわぞわと尻穴から腰骨全体に広がっていく。前の穴を犯されるのは快感を伴う屈辱だったが、裏門を陵辱されるの

は下半身から力が抜けるというか、関節がぐずぐずに崩れ落ちるような頼りなさだ。
（なっ……なんでっッ……お、お、お尻の、穴……なんかッッ⁉）
潔癖症気味なサラにとって、ある意味それは女性器を犯される以上の屈辱だった。どれほど心清らかであろうとも、人間である以上つきまとう排泄という行為、親兄弟にも見せたくない尻穴に指をねじ込まれ掻き回されるなど、頭の中が沸騰しそうになる。
「いっ……いやぁああアッッ……！　やめ……やめてぇ……ッッ」
ぐりっ、ぐりっ……ちゅぽんっっ！
アヌスから勢いよく指が引き抜かれ、「むりっ」と肉蕾から紅色の肉が指に絡まってはみ出てくる。解放された、と思ったのも束の間、今度はそこにぬるりと冷たい液体が垂れ落ちてきた。ぬちょぬちょぬちょと指の腹で菊門にまぶしつけられる。
「うひぃいッ？　ひゃぁんっ、ひゃふぅ、ひっヒフゥゥッッ」
謎の液体の冷たさにアヌスがきゅぅぅうっとすぼまって、はみ出した肉を腸内に押し戻す。男の指は放射状に広がった皺の一本一本に、ぬめった液体をなすり込んでゆく。こうまで尻穴に拘る理由に皆目見当がつかず、眼鏡のシスターはこの不条理な仕打ちに耐え続けるしかなかった。
（い……いったいなにを……どうする、つも、り……？）
粘液を擦り込まれた尻穴が、やがて熱く火照り始めた。摩擦によるものか、それとも新たな性感に目覚め始めている証左なのか、自分でも判別がつかない。だがその熱はポッポ

ッと腰全体に広がっていき、子宮に渦巻く快楽の火種に呼応していく。
「ひひひっ、この尼さんケツを弄られて、ま〇こまで熱くなってきたぞ」
真下から腰を突き上げる兵士が下卑た声で揶揄するが、反駁する言葉もない。今度は尻穴を弄られながら絶頂に達してしまうのか……と思っていたとき、アヌスから指が離れ、信じがたい事態が眼鏡シスターを襲った。
ごりっ、ぐ、ぐぐぐぅぅぅウウッッッ……!!
小さな尻肉を、背後の男が手で押し開く。深々と肉棒を呑み込んだ女芯、そのうしろには小さくすぼまった尼僧の排泄口が透明な粘液にまみれて光っている。男は猛った先端をそこにあてがってきた。
（えっ、な……なに……が、当たって……ッッ!?）
「もう十分にこなれただろう。行くぜ尼さん、ケツの穴にも食らいなっ……！」
「いぎひぃいいいイインッッッ！」
めりめりっ……たっぷりとぶちまけられたザーメンのぬめりを借りて、太く逞しい陰茎は眼鏡尼僧の尻穴を一気に崩壊させた。括約筋はぎしぎしと音をたてる勢いで拡張され、野放図に膨れあがった肉槍を受け入れざるを得ない。前とうしろ、今宵初めて男を迎え入れるシスターの二穴が、ひくひくと震えわなないた。
「おぁあああンンッ、おほぉっぉおンンンッッッ！　おひぃ、あひぃァウウッ」
最初に指で、続いて潤滑油となる粘液を擦り込まれた尼僧のアヌスは、深々と陰茎を呑

み込んでしまっている。腸壁をぐいぐい押し上げるその向こうで、肉一枚を隔ててもう一本の肉茎が膣穴を満たしている。みっちりと詰め込まれた二本の男肉のボリュームに圧倒され、頭がクラクラした。

「動くぞ、そら動くぞっ」

「拍子合わせっ、同時に突きまくれッッッ！」

がっしゅ、ぐっしゅ、ブジュ、グボォオンッッ‼

「ふぁああアア、あクゥ、くひ、クヒィ、ひっ、ひふわぁぁアンゥううっ」

真下と背後から腰を叩きつける二人の兵士は、ピストンのリズムを同調させて二つの女穴を抉り抜いた。同時に押し込むと腹部が圧迫されて息が詰まり、同時に引き抜かれると言いしれぬ虚脱感に気が遠くなる。特に直腸からいきり立つ肉槍がごっそり抜かれると、内臓まで一緒に尻穴から流れ出るような恐怖に苛まれる。

ぶちゅチュッッ！　ぐじゅ、ブチュチュウウンッ‼

溢れるほどの白濁を注ぎ込まれた膣壺が抉り回されると、噴き出したザーメンと愛液の混合液が肉の摩擦で白く濁る。噴きこぼれるそれは下にいる男の陰嚢にまで垂れ落ちて、白いあぶくは黒レオタードに、太腿肉に飛沫となって撒き散らされる。精液の生臭い臭気と潮の香りが入り混じって、摩擦熱で拡散してゆく。

ぐぼっ、グププッッッ！　ぶぼ、ズボボォムフンッ‼

激しく尻穴を抉る肉棒には、潤滑油代わりに塗布された液に直腸粘膜が混じり、ぶりぶ

りと引き出される腸肉にまとわりつく。ときどき勢い余ってペニスが尻穴からすっぽ抜けると、押し込められていた空気が「ぷひっ！」と小さな音をたてて、飛沫とともにアヌスから漏れ出る。透明な飛沫はナイロン地に覆われた尻にいくつもの染みを作る。

「あひっ、イィッ、いいィッ！　いやぁ、イヤイヤァアアアッッッ!!」

猛烈な二穴責めに、尼僧の口からは相反する言葉が交互にこぼれた。なにが「いい」でなにが「イヤ」なのか、もう自分でもわからない。薄い肉の壁だけで区切られた二つの恥ずかしい穴を縦横無尽に抉り回され、どろどろの感覚だけが蛇のように背骨を這い上がって、理性をじわじわと麻痺させてゆく。

「見たかね、汚れを知らぬ少年よ……シスターでございと取り澄ました偽善者の仮面が剥がれ落ち、浅ましい肉欲に溺れのたうつ惨めな様を……」

「……!!」

悪意に満ちた神父の言葉にハッと顔を上げる。視線の先にははたして、椅子に拘束された少年が、茫然と自分を見つめていた。怯えたような少年の眼差しに、紺髪の眼鏡尼僧は居たたまれぬ気分に陥る。全身が火のように熱く燃え、髪の生え際にじとりといやな汗が浮かぶ。少年の目の前でいままでどんな痴態を晒してきたかという忌まわしい記憶が、沸々と甦って尼僧を苦しめた。

美しく聡明なシスターが自らの手で自らの乳房を揉み、股間をまさぐっては淫らな声を上げた。挙げ句に男の腰に跨がって男性器を呑み込み、純潔を失ってしまう様をまざまざ

と見せつけたのだ。そしていまは膣だけでなく尻穴にまで陰茎をねじ込まれ、あられもない嬌声を上げてよがり悶えている。
「シ……シスター、サラ……」
「マ、マキシミリアン、くん……ちがう……違うの」
言い訳はどこまでも虚しかった。少なくとも彼が一連の行為の意味を理解しているのは、股間を見ると明らかだ。少年のズボンの前の部分はもっこりと興奮のために盛り上がっている。教会育ちの初心な少年は、男女が結合しているのを見るのも初めてなのだ。まして犯されているのが、知的で清楚なシスターサラであればなおのこと。
どんな状況でも冷静さを失うことなく、ときに男顔負けで銃器を自在に操る眼鏡のシスター。その顔が屈辱と痛みに歪み、無惨な陵辱に為す術もない。卑劣なサタニストやアレクシオへの怒りや恐怖はあったが、少年もまた一人の男であった。見てはいけないと思いつつ、激しく二穴を犯される尼僧の痴態を凝視せずにはいられないのだ。
「見られながらってのは興奮するねぇ……あの坊やにうんと見せつけてやろうぜ」
尻穴を犯していた男は神父と少年の視線に気づいたのか、紺髪に隠れた耳たぶをれろりとねぶってから、悪魔のような声で囁いた。
「い……いやぁァァアアッッッ!!」
男はぐっと骨盤を抱え込むと、前にも増してピストンの速度を速めた。それに負けじと下の兵士も熱くたぎる子宮をぐんぐん突き上げる。

「マッキ……くんっっ……み、ないで……えっ」
シスターの訴えは少年の耳に届かない。それほどに目の前の光景は無垢な少年には刺激的なのだ。少年の視線が全身に突き刺さるのを感じながら、紺髪のシスターはいつ果てるともしれぬ陵辱に晒されるしかない。一心不乱に痴態を見つめる少年の横顔を満足そうに見つめ、神父アレクシオは最後の審判を下した。
「虚偽は暴かれた、罪深き娘に断罪を！　誘惑の肉壺に裁きを打ち込まれるがよい!!」
ずいっと踏み出しながら、驕慢な神父は聖装の前を開けてイチモツを取り出した。その異様なる外観に少年も、欲望にまみれきった傭兵たちでさえ目を見開く。みりりと血管の浮き出た茶色い薪、いや棍棒のような巨大さ。先端部は金属の光沢を放ち、カリ首が反り返っていかにも獰猛そうだ。
「馬並み」という言葉が冗談ではないその大きさに、なにより驚いているのは眼鏡の尼僧だった。近づいてくる神父から逃れようにも、前後の穴を貫かれ、身動きも取れない。男たちが腰の動きを再開させると、膣と直腸を擦り立てられる刺激に悶えるしかない。
「ひぃ、いやあ、いやあっ！　来ないでっ、来ないでぇえ」
悲痛な叫びをむしろ楽しむように、闇の神父は敢えてゆっくりと歩を進めシスターに近づいてくる。遠目にも十分巨大だった肉棍棒が目の前に圧倒的に迫ると、シスターは言葉を失った。艶やかな紺の髪が掴まれ、身体を屈まされた。「いや……」と言いかけた唇にずぽりと赤銅色の亀頭が突き入れられる。

ぐぷぷぷッッッッ！　ぼごっ……ボゴンッッッ!!

力任せにねじ込まれた巨男根の先端が、頬粘膜を力強く突き上げる。ほんの先端だけで喉奥に達し、哀れな尼僧は窒息の恐怖に怯えながら、懸命に顎に力を入れる。だがいくら歯が食い込もうともアレクシオは好色な笑みを浮かべるだけで、それは抵抗にすらならなかった。

「おごっ……もゴォオッ、おぐぅううウウ〜〜ッッ!!」

魔神父は紺のロングヘアを両手首に巻きつけるようにして、手綱のようにそれを引きながら下腹部を突き出してくる。生え際がぴりりとひきつって、歯茎によりあわさった筋肉のような肉幹が激突する。それは肉棒と呼ぶにはあまりにも高密度かつ高硬度で、顎の骨がビリビリと痺れて脳天まで衝撃が走る。

ぐぼっ、ぬぶブブッッ！　むりっ……ごりりぃィイッッッ!!

シスターの喉が内側からぽこりと膨れあがる。ついにアレクシオの長尺槍が半分ほどもシスターの口内を占拠したのだ。大人の肘と大差ない超巨大サイズの先端は、気道を完全に塞いで細く青白い華奢な首にまで押し入っていた。

（！　……!!　……ッッッッッッッッッッ!!）

両目がくるんと白目を剥き、酸欠で意識を失う寸前を見計らったように、闇神父はグローブのような手で尼僧の頭を掴み上げ、思いきり腰を引いた。

ずぼぉおォォオオオンンッッッッ！

「かはぅっっ……！」

唾液を撒き散らし、ようやく超巨根から解放される。顎関節がぎしぎしと痛みを訴えている。虚ろな目で見上げると、悪徳神父は獰猛な笑みを浮かべて女の拳ほどもある亀頭を揺らしていた。唾液にまみれたそれが喉いっぱいに詰め込まれていたのかと思うと、気が遠くなりそうだった。

そんな怯えを見透かしたように、魔神父はそっと手を伸ばして紺色のロングヘアを優しく撫でてみせ、唇の少し手前に先端を近づけた。

「これは洗礼なのだ……哀れで惨めな女よ。悔い改めて我が肉を受け入れよ。迸る飛沫を全身に注がれれば救済が訪れよう。さもなくば……」

みりりと膨張の兆しを見せる亀頭に、意識が朦朧となりかけているシスターは恐怖に震え上がった。おずおずと口を軽く開け、くっきりと刻まれた尿道に唇を被せるようにしておそるおそる頬をすぼめた。

ちゅぷっ……。

巨肉の先端は電熱コイルでも仕込まれているかのように熱く、そして野生動物のような牡臭が鼻孔に充満した。ちろちろと舌先を這わせると、濃厚な肉そのものの味が口いっぱいに広がった。

（あ、ぁ……す、すご……ぃぃ……っっっ）

たとえそれが魔の領域に属していようとも、神父アレクシオの放つ圧倒的な生命力はサ

ラの意識を圧倒した。陵辱の限りを尽くされ、疲れ果てたシスターは、言われるままに神父の肉棒をしゃぶり始めた。

ちゅぱっ、ちゅぷっ、むチュ、むちゅッッ……！

たっぷりの唾液を絡めて亀頭の周辺に舌を這わせ、皮の折り重なった部分を舌先でほじくる。野趣溢れる味がいっそう濃厚になり、いつしか尼僧は巨大陰茎に両手の指を回し、夢中でねぶり回していた。

（私……なんで……もう、なにも考え……られ……）

「洗礼だ！　猛り立つマラを以て卑しき女の肉を清めよ!!」

朗々と響くバリトンに操られるように、股間の二穴を犯す兵士たちの動きが激しくなる。

ずぶっ、ずぼ、じゅぽぽっ、ジュボンッッ!!

子宮がごんごんと突き上げられ、尻穴が腸粘膜を撒き散らしながら陰茎を呑み込んでひくひくとわななく。ぎゅむウゥぅ、とレオタードの上から乳房に指が食い込んで乳首をつねり上げる。被虐の色に染まった喘ぎ声が白い喉からこぼれ出る。

「むふぅぅゥウウウッッ、おふぅっ、ヌフゥムゥゥウウンンッッ！」

ふら……っと別の兵士が、イチモツをそそり立てて近づいてきた。ガッ、と華奢な右手首を掴み上げると神父のデカマラから引きはがし、己の肉棒を握らせてしごかせ始める。反対側からももう一人、左手を掴んで熱い高ぶりを握らせると、がしゅがしゅとリズミカルにしごかせる。

しゅっ、しゅごっ、ゴシュシュッッ！

「うぉおおっ、おうぅううっ！　尼さんの手がオレのちんぽをぉっっっ」

先を越された兵士は闇雲にシスターの紺の髪に陰茎を近づける。すでに幾度となく精液をぶちまけられ、ガビガビになったロングヘアをペニスに巻きつけたり、後頭部に肉棒を押しつけたりする。

ほんの少し前まで清らかな処女だった紺髪のシスターは、いまや男たちに群がられ、膣と尻穴を同時に犯され、汚し辱められている。だが長大な肉茎を頬張った尼僧の顔はだらしなくにやけ、来るべき快楽の大波を期待する淫らな色を目に宿していた。

「あふぁアゥゥ……ちんぽ……いっぱぁい……精、液っ……むふぅぅんッッッ!!」

ぐりりんっっ、と少年のような腰が妖しくくねった。

きゅぅううんっ！

膣肉が痙攣を繰り返しながら収縮し、括約筋もそれに呼応して陰茎を絞り上げる。

「おぅぅぅぁあああっっ、出っ、で、でるっぅウウッ……ッッ!!」

「ケツにっ、ケツにぶちまけ……うぉぉおおっ」

どくっっ、どくどくドビュビュぅううん〜〜〜〜っっっっっ!!

灼熱の迸りが淫らな二つの穴に注ぎ込まれる。子宮と直腸を揺るがし、肉をとろかす毒液の注入に、欲に溺れた神の花嫁は歓喜とともにそれを受け入れた。

「はひゃぁっっ……イクゥゥっ、ひぃぃぃオッォォオオオンンンッッッ!!」

Oの字に開けられたアクメの唇めがけ、悪徳神父は肉棒を突っ込んでミルクをぶちまけた。その勢いたるや馬の小便のごとく大量かつ長時間に渡って尼僧の口中を満たし、引き抜いてもまだ放出は止まらない。レンズを真っ白に染め、ケープやレオタード生地にこんもりと白濁の丘を作り上げた。

どぷっ、どくどくっ、ビシャアアッッッ！

神父の射精に続くように両手に握った茎からも、髪に擦りつけられた陰茎からも次々と白濁が噴き出して尼僧衣や紺の髪、ありとあらゆる部分に洗礼のザーメンシャワーを浴びせかけてくる。

「あひ……はひ、ぃ……っ。ザーメン……ちんぽ……ちんぽぉ……っ」

全身ザーメンまみれの紺髪眼鏡のシスター、サラの双眸は理性の光を失っていた。

ンダーな肢体は尿溜まりに倒れ伏した。

石床に昏倒した相棒に、赤毛のシスターは絶頂の余韻に悶えつつ懸命に呼びかけた。微かに肩が上下動しているので息はあるようだが、返事はない。

「サ……サラッ……へ、返事を……ひぅっ、サ……サラ……ッッ！」

「ふん、もうこれも必要なかろう……己の淫欲が招いた結果を見るがよい」

ギギィ……ギリッ、バチィンッッ！

手足の戒めが弾け飛んだ。小型手錠も金属環も、指の力だけで強引にねじ切られている。魔の力はアレクシオに巨根だけでなく、人間を超越した怪力まで与えていた。

ずぼぼぉんっっ！

大きな手が骨盤を掴むと、膣いっぱいに詰め込まれていた巨根が勢いよく引き抜かれる。快感の余韻を残す壺肉を擦り上げられ、赤毛シスターはわななきながら前につんのめって床に四つん這いに崩れ落ちた。

「はひぃんっっ」

びしゃあっ！　ぼどっ、ぼとととっっ……。

自ら垂れ流した尿溜まりに膝をついた尼僧の股間から、大量の白濁がこぼれ落ちた。

ぷぅんと立ち上る卵の腐臭に咳き込みながら顔を上げると、その目が驚きに見開かれる。椅子に拘束されているマッキ少年が、真っ青な顔で唇を震わせている。少年の身体から、

特に股間の部分から強烈な魔気が発せられていた。
「マ……マッキ……アレクシオ……て、めぇ……なにを……っ」
「見ての通り、『器』に魔の力が召喚されているのだよ。器は力に満たされ、無垢な少年の魂は闇に貪り食われるだろう。すべてはお前の淫らさの引き起こしたこと」
うそぶく闇神父をキッと肩越しに睨みつけると、赤毛のシスターは少年のほうに這いずっていった。一歩踏み出すごとに振動が腰に響いて絶頂の揺り返しが脳髄に突き刺さる。額を冷や汗でびっしょり濡らしながら、青ざめた少年の前にようやくたどり着く。
「シ……シス、ター……ミ、リア……ッ」
たったそれだけを口にするだけで、少年は疲労困憊していた。強大な闇の力が流れ込んでくるとはいえ、肉体は脆弱な少年のもの。体内を荒れ狂うおぞましい魔力にいつ意識が飛んでもおかしくない。
ばりっ！　バリバリバリィィッッッ!!
質素だが丈夫そうなズボンが音をたてて破れた。下着を軽々と引き裂いて、内側から弾けた肉の凶器が姿を見せる。元のサイズは知らないが、いまの少年のそれはアレクシオの巨根に勝るとも劣らぬサイズでビンビンにそそり立っている。
衣服から解放されてもまだ、少年の顔色は戻らない。それどころか汗をダラダラ流してもはや声も上げられない様子だ。一体どうすれば……と途方に暮れるシスターの背中に、嘲るような神父の声が浴びせられた。

「どうした、ぼやぼやしていると淫気が限界に達して少年の魂が消し飛ぶぞ。その乳牛のような乳で、猛ったモノを鎮めてやったらどうだ？」
挑発だということはわかっていたが、それに従うより他にマッキを救う手段は思いつかない。赤毛の尼僧は上体を起こすと、震える両手で白い肉球をぎゅっと持ちあげた。破れた切り込みから乳がこぼれ、谷間が丸見えになっている。
（マッキ……あたしが護るって言ったのに、ゴメン……ゴメン……）
肌が汗ばみ、鼓動が早鐘のように鳴り響く。ぽっぽっと体中が熱くなるのを感じながら、そそり立つ肉杭の先端を乳房の谷間に挟み込んだ。
「あうぅっ……あ、熱い……ッッッ！」
少年のペニスの熱さに、シスターは目を見張った。火照った肌よりもなお熱いそれは、まるで灼けた鉄のようだ。お湯の詰まった風船のような肉球を左右からすくい上げるようにして、灼熱の淫竿をそっ……と擦り上げる。
「はぅうっ……！　シッ、シス、ター……ッッッ」
「喋らなくて……いいから……あ、あたしに、任せて……っ」
パイズリなどという下世話な言葉は知らなくても、シスターはごく自然に巨乳で少年の若茎を刺激していく。Eカップを優に超える肉球に挟み込まれても、少年の巨根は先端がはみ出てしまう。うっすらと汗ばんだ風船を上下に揺すると、真っ赤に灼けた金属のような亀頭が谷間から出たり入ったりを繰り返した。

しゅっ、しゅっ、くにゅっ、プニュンッッ！

ちら、と少年の顔を見上げると顔面の汗はまだ引いていないが、やや血の気が戻っている。アレクシオの言いなりになって、淫らな奉仕をするのは恥ずかしいが、マッキの魂を救うためなら仕方ない。それに、どんな形でもいたいけな少年を悦ばせられるということに、尼僧は軽い興奮を覚えていた。彼の陰茎がこんな凶暴な姿になったのも、自分の淫らな姿を見たためだと思うと、頭の芯がカッと熱くなるようだ。

（マッキ……あたし、が……いっぱい、だ、出してあげ、る……っっ！）

柔らかな肉球に鋼鉄の竿が沈み、激しくしごき立てる。谷間の部分が赤く擦れてひりひりしたが、その痛みにさえも愛おしさが募る。首元まで赤黒い亀頭が迫り、刻まれた尿道がくっきりと見える。

くぷっ……むふっ、ぐぷんっっっ……！

気がつけば唇を開き、先端をずっぷり頬張ってしまっていた。子どもの拳より大きなそれを頬張るだけで、顎が外れそうだ。溶岩のように熱を帯びたそれに舌を絡めると、男根独特の臭気としょっぱい味が口に広がる。だが鼻孔に抜ける臭気は、傭兵たちとは少し違う。猛々しい主張ではなく、思春期の若さ特有の青臭さを胸いっぱいに吸い込んだ。

むちゅっ、れるんっ……はむっ、ふむぅうんっ……！

乳房でむりっと持ちあげるように挟みながら、唇をキュッと引き締める。唇からは、どくんどくんという血流の鼓動がはっきりと伝わってくる。頭を俯かせると先端はたちまち

喉奥に達し、まぶしつけた唾液をじゅるじゅると啜り上げた。
（熱くて、堅い……これが……マッキの、お、ちんちん……）
凶悪な外見に成り果てているが、目の前に迫るイチモツの根元には、茶色の陰毛がほんの少し生えているだけだった。見かけは変わってもマッキのペニスなのだ、と思うと胸が熱くなって、シスターは首を振り立て、乳房をせわしなく上下動させて若茎を擦り立てた。イチモツをしゃぶるのはこれが初めてだというのに、自分でも驚くくらい貪欲に、赤毛の尼僧はリズムを取って少年の豪物に奉仕を続けた。
「うぁっ……ふは、ぁあ……ッッ！　シス、ター……あぁ、ふわぁあ～～～ッッッ!!」
どくっ！　どピュッ！　どビュビュ～～～ッッ!!
「きゃはぁんっっ！　あっ、ふあぁあんっ、んっ、ふヒィイイ～～ンッ」
胸の谷間で突然ビリビリと陰茎が振動したかと思うと、真っ白い樹液が噴水のように噴き上がった。真上に発射された白濁は赤毛の前髪にまで達し、額や頬など至る所に降り注いだ。半開きの唇にもびゅびゅっと飛び込んで舌を白く染める。
ケープに溜まったそれは「どろっ」と垂れて乳房の谷間に白い池を作る。乳房をぎゅうっと寄せ上げると、幹に残った液が噴き上がって弧を描き、ピンクの乳首に命中した。くりっ……と指先で乳首をつまむと、ぬるりと白濁のぬめりで乳首が逃げた。
（マッキの……せ、せい、えき……ッッッ）
肌に触れる熱、ムッと立ち上る生臭い臭いを嗅いだ途端、頭の芯が揺すぶられる。れろ

『第六章　狂乱の姉妹相姦と触手陵辱』より

「いやぁあああっ、んぶぅぅ、んぉォッ……！」

指より少し太い触手が三本、五本と女の股ぐらにねじ込まれ、尻穴にも同様にねじ込まれる。悲鳴を上げる口には十本以上の触手が潜り込んで喉を不気味に突き上げる。

襲われるのは女だけではない。男のアヌスや口にも触手は殺到し、宙高く持ち上げられたペニスには細身の触手が幾本も絡んで肉棒をしごき立てる。かま首をもたげた寄生虫のような触手が、どちゅっ、と肉棒の先端を貫いた。ごりごりごり……と海綿体を掻き分け、尿道までも犯してゆく。

「ヲヲヲヲヲヲヲヲォォォォォ……」

うねり波打つ触手の塊の中央から、おぞましい呻き声が響く。すでに人の形すら失った魔肉の中からアレクシオの首がずぶずぶと浮き上がってきた。その目は白く濁り、死霊術で操られたゾンビーのようだ。表情からは人の意志など感じられないが、巨乳シスターは禍々しいまでの力の凝集を感じた。

「深淵をのぞき込むとき……」

どこか朦朧とした口調の声が響いた。ハッと目をやると、触手に絡め取られた紺髪の眼鏡シスターが、虚ろな眼差しで触手の塊と化した元神父を見つめていた。

「サ、ラ……？」

「……深淵を……長くのぞき込む、とき……深淵もまた……こちらをのぞく……あれは、もう……『アレクシオだったもの』……だわ……」

どこまで意識を保っているかもわからない相棒の言葉に、ミリアは頷いた。あまりに過剰な魔の力を身体に宿した結果、制御を失って暴走しているとしか思えない。あの触手の塊を動かしているのはアレクシオ個人の意志ではなく、闇そのものが持つ悪意だ――――。

ごくり……と、赤毛の尼僧は生唾を飲み込んだ。

磔刑のように空中に吊り下げられたシスターズの前に、幾本もの触手がかま首をもたげている。眼下では傭兵や女たちが大量の触手に呑み込まれんばかりに半身を埋め、延々と犯され続けている。二人の尼僧はおぞましい怪物の最後の贄だ。

開脚させられていた下肢がさらに大きく広げさせられ、そこに無数の触手が殺到した。太腿のつけ根に巻きついた触手がぬめぬめと粘液を擦りつけ、幾本もの淫手が素肌とボディスーツの間にもぞもぞと潜り込んで股間を擦り始める。

にゅるっ、ずるっ……ずぶっ、ジュプぷぷ～っっっ！

度重なる陵辱を受けた肉壺は、悔しいかな触手の侵攻を拒絶できない。最初の一本はまだ平気だったが、うねうねとうねりながら二本、三本と螺旋状に絡みあいながら膣穴を満たしてゆく。ペニスと違って根元というものがないので、ごりり、ごりりっと三本の肉の蛇が交互に子宮口を突き上げてきて、トーンダウンしていた愉悦がまた燃え始める。

「はうっ……あっ……くひぃ、うぅふぅぅ～～～っっっ!!」

にゅるるるっ、と脇の下から顔を覗かせた触手が、破れた穴からこぼれ出た真っ白い巨乳の上を這い回る。ザーメンのぬめりとはまた違う粘液が塗りたくられ、蛇のような生臭

さが鼻孔をくすぐる。肉縄はぐるんっと乳球を一周し、とぐろを巻く蛇のように乳房を揉み捏ね始めた。

（こんな……気持ち悪いのに巻きつかれてるのに、あ、あたしは……ふひぃいっっ！）

粘液に触れた肌が熱い。なにか特殊な媚薬作用を持つ粘液なのか、それとも快楽に慣らされすぎた結果なのかはわからない。ただ言えるのは、自分の身体が来るべき陵辱への期待に熱く火照っているということだ。

熱に浮かされた眼差しを傍らに向けると、パートナーである眼鏡の尼僧も無数の触手の群れに嬲られていた。のけぞった白い喉がボコボコと異様に蠢くのは、口にねじ込まれた触手の動き。眉根をひそめ目を固く閉じ、ひくひくと小鼻を膨らませてかろうじて息をしている状態だ。

スレンダーな肢体と黒のレオタードの間にも触手は潜り込み、その動きが黒の布地にくっきりと浮かび上がっている。乳といわず脇腹といわず、全身余すところなくダイレクトに触手が擦り立て、締めつける。ナイロン地は粘液でぐっしょりと濡れ、てらてらと光沢を放っている。

ぬぷっ、にゅぷっ、ヌプ、ヌプッッ！

控えめな乳房に絡み脇に巻きつく触手とは別に、股間にも当然のように数本の蛇が頭を突っ込んでくねっていた。鞭のようにしなると「じゅぼっ！」と数本の蛇が一度に頭を引き抜き、また「じゅぶんっ」と潜ってゆく。激しい抽送を続ける肉蛇の後方で、ひときわ

太いパイプのような触手がずっぷりとアヌスに潜り込んで、「ぞぞっ、むりむりっ」と静かな、そして不気味な動きを続けていた。

そんな哀れげな相棒の姿を見る赤毛尼僧の胸が、早鐘のように高鳴っている。肉体には忘れられない強烈な快楽を刻み込まれ、抵抗も拒否もできない。いや、幾度となく気をやった女体は、むしろ快感を貪ることを純粋に欲していた。

（サラ……ごめん……あ、あたしも……どうしようも……んっ、あぁぁぁっ……！）

ぬちゅっ、ぬりゅ、りゅりゅ……っ。

乳房に巻きついた粘液まみれの縄が不気味に肉球を締め上げた。ぬらぬらと粘液質の身体を擦りつけ、その生暖かさにゾクゾクと背筋が痺れる。元より尼僧の豊満な肉体は度重なる陵辱によって十分すぎるほどに揉みほぐされ、全身の毛穴からじくじくと汗が流れ、逆に毛穴に粘液が擦り込まれる。

「ふぅぅはぁアァァぁ……ッッ！　きも、ちイィ、きもひいィ……あひゃぁウフゥぅっ!!」

ぶしゅっ。びゅびゅびゅっっ！　びゅるるるッッッッ!!

股間からまた透明な潮が噴き出す。肉壺の中で絡みあっていた三本の触手がほどけ、一本ずつ膣壁を擦りながら頭部を現す。三本のしなやかな肉縄が交代で蜜壺に差し込まれ、引き抜かれると間髪入れずにもう一本が潜り込み、ハイピッチで肉穴を抉り続け、膀胱を圧迫し続ける。

ごりっ、ごりごりっ、ぬぶぶブブブ〜〜〜〜〜ッッッ!!

尻穴にも淫肉縄は容赦なくねじ込まれる。膣穴のように激しく出入りはしないが、裏門の肉に細かな振動を与えてくる。膣からの強烈な振動に後穴の微振動が加わって、熱いうねりが背筋を駆け上がり脳天に突き刺さる。

「はぁああぁぅぅぅフゥゥゥぅんんンッッッ！　いく、いっっっックゥぁああっっ‼」

手足に巻きつく触手を振りほどかんばかりの勢いで、びくびくと痙攣を繰り返す。だが、熱にのぼせ絶頂の余韻に浸る中にも、肉体はまだ物足りなさを感じていた。もっと強烈な刺激が欲しい。なにもかも忘れて快楽に溺れ狂ってしまうような、身を焦がし尽くすほどの刺激を貪りたい。

「んあぁァァ〜……んふぅぅゥウ〜ンン……」

Eカップのバストを突き出すようにのけぞらせる尼僧の喉から、発情期の猫が出すような甘い声が漏れた。するとその声に呼応するように、乳房に絡まっていた触手が先端を伸ばし、かま首をもたげた。つるっとした先端部に「ぴぴ……」と亀裂が走るや、それは生き物の口のようにぱっくりと開いた。内側には口腔を思わせる濃い紅色の肉、上下それぞれに小さな歯のような突起がずらりと並んでいた。

ぞくうっ。

その邪悪なあぎとを見た瞬間、脳髄が痺れる。まるで尼僧の意志が通じたかのように、触手の顎は大ぶりの突起に乳輪ごと食らいついて歯を沈めてきた。

「あぁ……あ、ぁ……んくぅううっっっ！」

ぎりっ……ぎししっ……むき出しの乳首に歯の堅さが伝わってくる。激痛ではないが、ただ触手に擦られるよりも何十倍も強烈な刺激に、尼僧は悦びの声を上げた。肉縄がうねると左右の果実が千切れそうなほど引っ張られ、縦横無尽に揺り動かされる。

「はひぃぃぃぃ……ひぃぃぃぃ……んっっっ！」

燃えるような痛みが神経を炙り、尼僧は舌を突き出して悶え狂った。胸郭が激しく上下するが呼吸はまともにできず、酸欠で意識が遠くなる。己が身を食らわれ、しゃっくりのような息をつく唇に触手の撒き散らす粘液が飛び込んでくる。思わずこくりとそれを飲み下すと、喉がひりりと灼けた。

「ひゃくっ……ひっ……しゅご……きもひいぃぃ……っっっ！」

淫蛇の歯が食い込んだ部分から愉悦の火が立ち上って神経をとろかしにかかる。あまりに桁外れの快感は、死の予感にも似た甘く黒い蜜を分泌させる。こんな悦びがこの世にあったのか。おぞましき闇の儀式がきっかけで生まれたにもかかわらず、淫邪蛇がもたらす快楽は信じがたいほどの悦びを尼僧に与えてやまず、敬虔であるべき尼僧の口からは陵辱を求める言葉が漏れる。

「もっ……と、噛んでぇっっっ！　ちっ、乳首ぃぃ、イィイぃぃっっっ!!」

むりっ……みしっ、みりみり……っ。

触手が大きくうねり、快美に悶える尼僧の手足を折り曲げていった。下半身を持ち上げ、尼僧の位置から自分の股ぐらが見えるくらいまで屈曲させる。さらなる淫欲の宴に胸を躍

らせていると、一本の細い触手が目の前でクルクルと円を描いた。
巨根ほどもある触手群に比べると、指の太さほどもないその先端が「ぷちゅっ」と開き、小さな顎を尼僧に見せる。この程度の口に噛みつかれても気づかないのではないか……と思ってみていると、細淫蛇は思わせぶりにくねりながら、下肢のつけ根に近づいていった。赤毛の尼僧は細身の触手の悪意に突然気づく。
（あ、あぁ……そこは……そこは！）
ぴちゅっっっっ！
ちくっと虫に刺されたような痛み、だが小蛇が噛みついたのはもっとも神経の密集した真珠色の突起物。包皮からわずかに顔を覗かせた淫秘豆にミリ単位の歯が食らいついた。
「あひゃあぁぁひぃぃぃウァァァッ、うぇぇエエッ、ほぉぉぉぉオォンンっっ!!」
真っ赤に灼けた鉄棒で貫かれたような衝撃に、赤毛の尼僧は絶叫した。
乳房に刻まれた歯形がそれに共鳴するように熱く燃え、真っ白な女体の表面を歓喜の火が走る。藁のような極細の触手は全身を大きくうねらせ、肉芽を噛み取らんばかりにつまみ上げ、ぶんぶんと左右に振りまくる。
「あひぅぅォォォンッ、ち、ちぎれっ……死ぬ、死んじゃうぅぅぅひぃぃッッッ！」
ものすごい力で収縮する膣と肛門、潜り込んでいた肉蛇どもが苦しげに暴れまくる。膀胱が押されて「ぴゅ、ぴゅっ」と小水が弧を描く。
「はひっ、はひぃぃぃ……もうらめ……イキすぎて、死んりゃうぅ……ッッッ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/